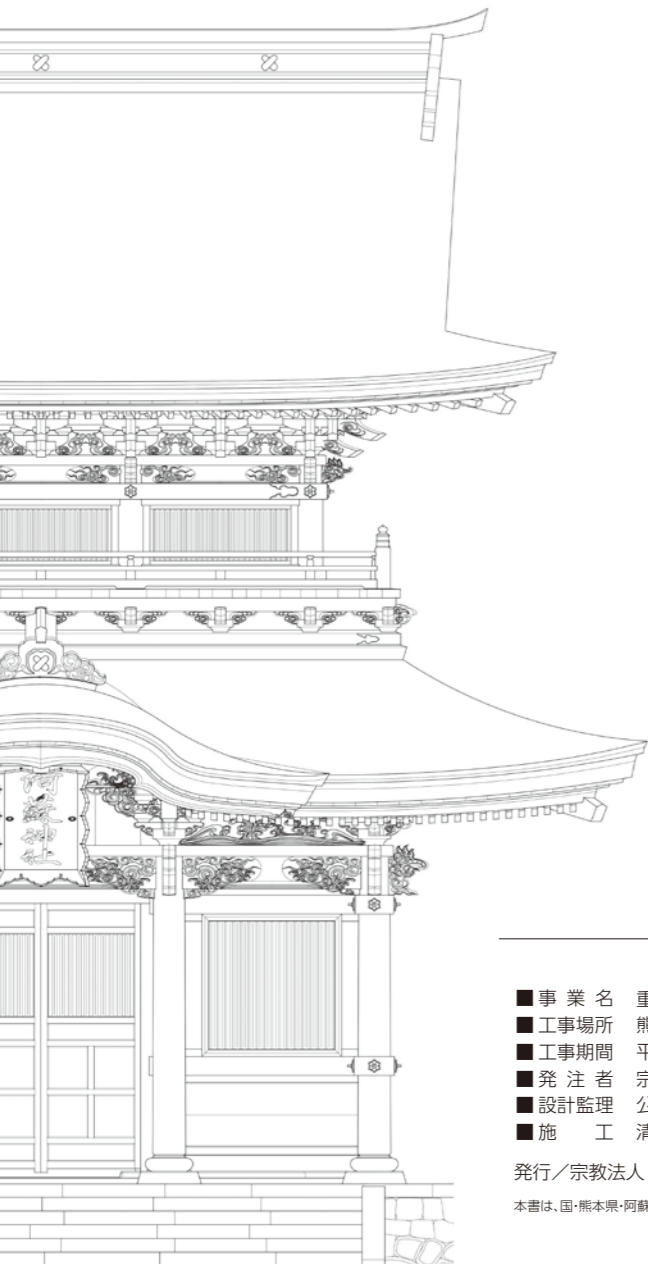




重要文化財

阿蘇神社一の神殿ほか5棟 保存修理(災害復旧)



- 事業名 重要文化財阿蘇神社一の神殿ほか5棟保存修理工事(災害復旧)
- 工事場所 熊本県阿蘇市一の宮町宮地3083-1
- 工事期間 平成28年7月15日～令和5年12月31日(予定)
- 発注者 宗教法人 阿蘇神社
- 設計監理 公益財団法人 文化財建造物保存技術協会
- 施工 清水建設株式会社 九州支店

発行/宗教法人 阿蘇神社 発行年/令和元年9月

本書は、国・熊本県・阿蘇市による上記補助事業の一部として刊行しています。



肥後一の宮 阿蘇神社

阿蘇神社は、神武天皇の孫神で阿蘇を開拓した健甕龍命をはじめ家族神12神を祀り、2000年以上の歴史を有する古社です。古来、阿蘇山火山口をご神体とする火山信仰と融合し、肥後国一の宮として崇敬をあつめてきました。

宮司職を世襲する阿蘇氏は、我が国でも有数の旧家として知られています。中世には武士化して肥後国を代表する豪族に成長しました。500社に及ぶ分社があるのは、こうした歴史背景に理由があると考えられています。

阿蘇神社の社殿群は、天保6年(1835)から嘉永3年(1850)にかけて、熊本藩の寄進によって造営されたもので、神殿や楼門などの6棟は国の重要文化財に指定されています。中でも楼門は九州最大の規模を誇り、「日本三大楼門」の一つともいわれます。

平成28年熊本地震により楼門が倒壊し、また拝殿が倒壊するなど、重要文化財以外の社殿についても甚大な被害を受けました。ただいま復旧工事を進めています。



一の神殿
天保11年(1840)

二の神殿
天保13年(1842)

楼門
嘉永3年(1850)

三の神殿
天保14年(1843)

拝殿
昭和23年(1948)

神幸門
嘉永2年(1849)

御札所
昭和3年(1928)

祈願者待合所

還御門
嘉永2年(1849)



大工棟梁 **水民元吉** (現在の熊本県宇城市小川町出身)
みず たみ もと きち
・文化12年(1815)小川町大工恵吉の次男として生まれる
・幼年期に川尻の金十郎に弟子入り
・15~16歳 上方を遍歴
・18~19歳 豊福社(現在の宇城市松橋町)を造営
・22歳 阿蘇宮造営の大工棟梁
この造営事業での大工技量が評価され、事業完了間近の嘉永2年6月35歳のとき、細川藩御用大工に抜擢された。
・名工金兵衛(本妙寺本堂の建立者)考案の「松葉規矩」をさらに工夫発展させた。
・明治20年(1887)73歳で没



災害復旧事業

平成28年4月16日に発生した熊本地震で被災した重要文化財一の神殿ほか5棟を保存するため、国・熊本県・阿蘇市の補助を受けて災害復旧工事を行っています。

工事期間は平成28年7月から令和5年12月までを予定しています。倒壊した楼門は全解体修理を行います。楼門を除く5棟の建造物は部分修理を行っていましたが、このたび平成31年3月をもちまして復旧工事が無事完了しました。

楼門は皆様のご支援をうけて令和5年度の完了をめざし修理を進めているところです。

名称	熊本地震 本震の被害	平成28年度 (2016)		平成29年度 (2017)		平成30年度 (2018)		令和元年度 (2019)		令和2年度 (2020)		令和3年度 (2021)		令和4年度 (2022)		令和5年度 (2023)	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
一の神殿	部分損壊					部分修理											
二の神殿	部分損壊			部分修理													
三の神殿	損壊大		部分修理														
楼門	全壊		解体格納	部材の修復	部材の修復・組立工事												
神幸門	部分損壊			部分修理													
還御門	部分損壊			部分修理													



一の神殿



天保11年(1840)建立。平成31年3月復旧完了。



向拝の彫刻(正面)



向拝の彫刻(背面)

一の神殿の彫刻は、竜のように見えますが、これは飛龍という霊獣です。

参考文献によると、竜と異なる図像の特徴は、尾が竜は蛇蝎型なのに飛龍は魚の尾びれ型であること、背中は竜が鱗のに対し飛龍は羽毛であること、そして竜にはない翼が飛龍にはあることなどが挙げられています。

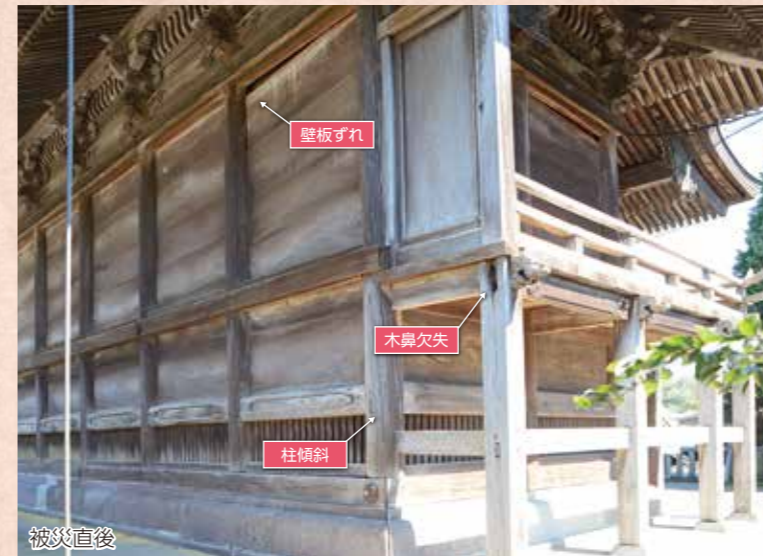
飛龍は水を司る霊獣とされ、日光東照宮には御水屋にも飛龍の彫刻が施されています。また、水を司ることから、防火の意味をこめて施されることもあるようです。そして、水を司ることによって波とともに彫刻されることが多く、阿蘇神社一の神殿の飛龍も波とともに彫刻されています。

(阿蘇神社HP「修理工事ごぼれ話」より)



神殿の小屋組等に残された墨書から判明した神殿造営時の大工。棟梁の出身地である現在の宇城市のほか熊本藩全域の大工が携わっていることがわかります。

復興の歩み



地震で傾いた柱はジャッキで軽く浮かし足元を引き寄せて傾斜直しをしました。ずれた壁板は一旦取り外して、歪みがあるものは矯正し元の位置に戻しました。欠失した木鼻は在来に倣って忠実に再現しました。

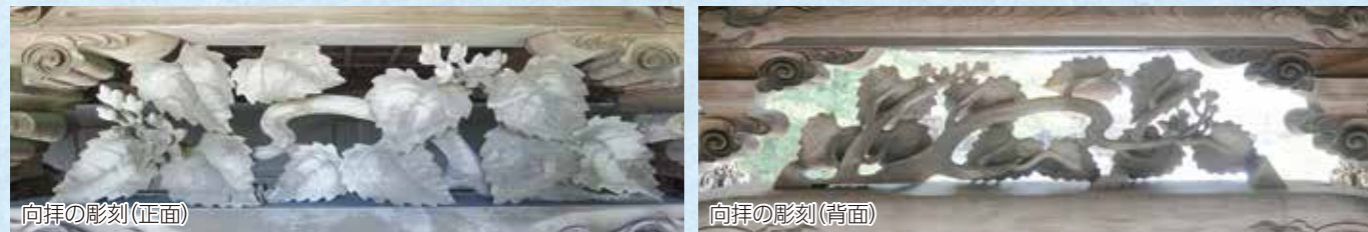


地震でずれた浜縁と木階は一旦解体し、腐朽部は丁寧に刻木などの補修を行って、旧規の通りに復旧しました。ずれた階段石も旧規の位置に戻しました。部分解体して旧規の位置に正確に戻すにはミリ単位の精度が求められます。

二の神殿



天保13年(1842)建立。平成31年3月復旧完了。



向拝の彫刻(正面)

向拝の彫刻(背面)

二の神殿向拝中央の彫刻は、桐と思われます。

花卉が5枚である点や葉が花に比べかなり大きい点は実物を想起させ、蕾の形は家紋などに使われる桐紋を思い出させます。しかし、葉はギザギザがなく5つに割れた形で表現されることが多い中、この彫刻では5つに割らずにギザギザした輪郭で表現されています。何か意図があるのでしょうか。

桐は、材質としては軽く柔らかいが狂いが少なく、さらに吸湿性が低く耐火性に富むことから、筆筒などの家具に使われてきました。また、古くから鳳凰という霊獣が棲む樹木とされ、建築彫刻では鳳凰との組み合わせで彫られることが多いです。



向拝の手挟の彫刻(内側)



頭貫木鼻(身舎)



頭貫木鼻(向拝正面側)



向拝の手挟の彫刻(外側)



頭貫木鼻(向拝側面側)

箇所によって
少しづつ異なる頭貫木鼻

復興の歩み



被災直後



木階・浜縁の解体



浜縁の復旧

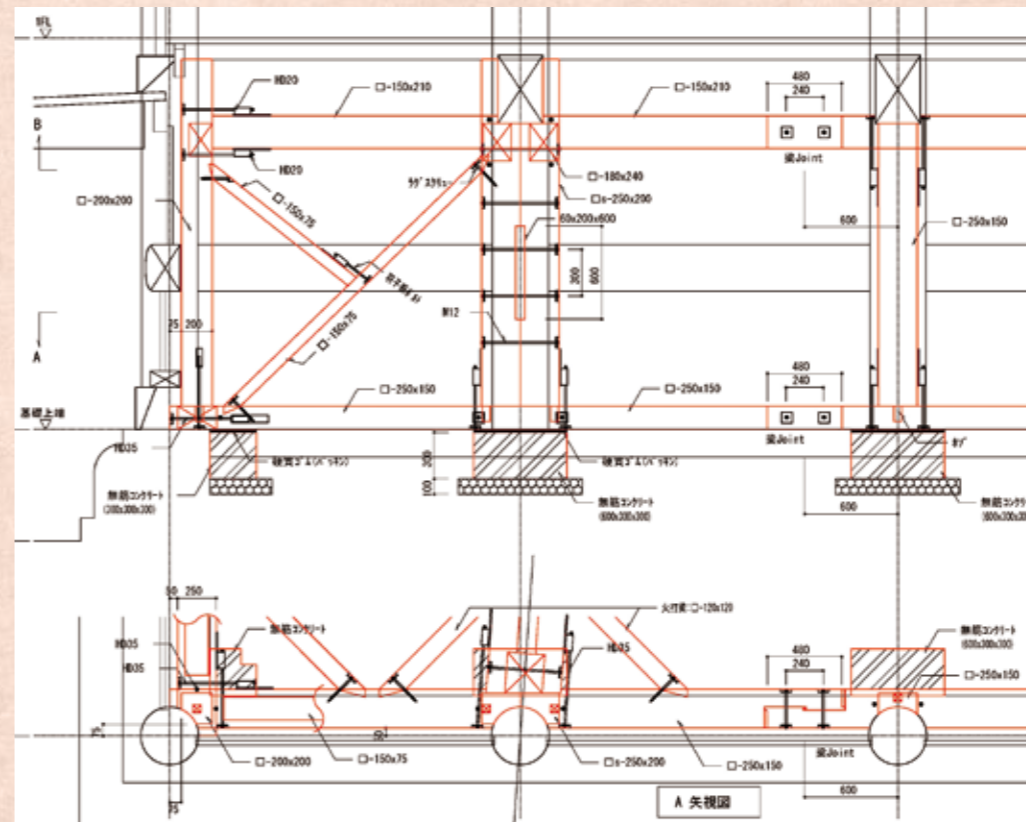


高欄のすれ直し



破損部の補修

地震でずれた壁板や経年による腐朽箇所を修理するため浜縁と木階を一旦解体し、傷んでいるところは取り除いて新材に置き換え、また元の通りに復旧しました。



修理前



方杖取付け



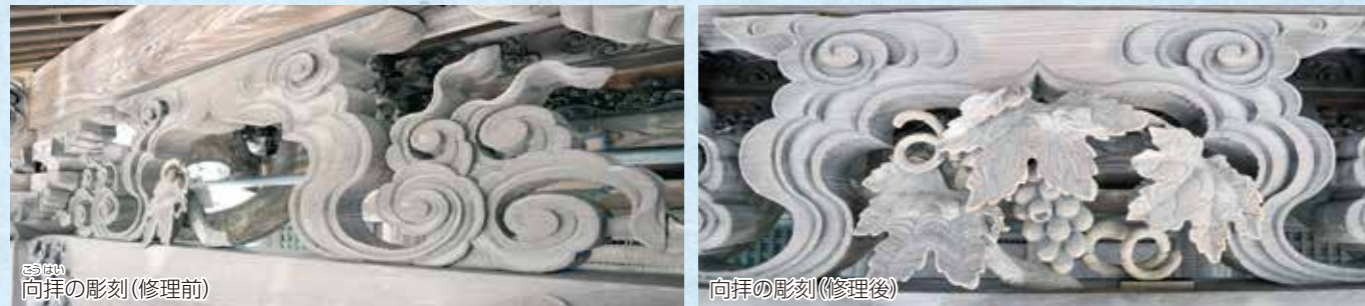
耐震補強完了

倒壊は免れましたが柱が傾くなどの被害があった神殿3棟については、耐震診断を行った結果耐震性能が不足していることが判明し、文化庁の指導を受けて床下で方杖による補強を施しました。建物周りに木柱を組むことで方杖を建物に直接ボルト締めせずにもみました。木柱自体も建物に釘1本使わずに設置する事ができました。

三の神殿



天保14年(1843)建立。平成31年3月復旧完了。



向拝の彫刻(修理前)

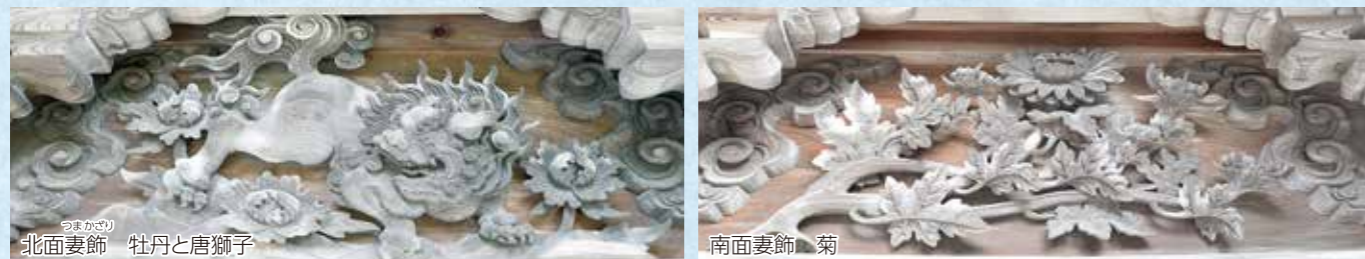
向拝の彫刻(修理後)

三の神殿の彫刻は、葡萄です。

枝がツル状で、5つに割れ輪郭がギザギザした葉など、実物の特徴を良く表現しています。そしてなんととても小さい球状の果実が固まってついている形から葡萄であるということがわかります。

葡萄は古今東西様々なモチーフに使用されている植物であり、子孫繁栄などの意味があります。日本では「古事記」において、伊弉那岐命が黄泉の国から逃げ帰るときに投げ捨てた鬘が葡萄葛となったという記述がありますが、この葡萄葛は山ブドウという説があるようです。また、建築彫刻ですと葡萄と栗鼠という組み合わせで彫られることが多いです。

(阿蘇神社HP「修理工事こぼれ話」より)



北面妻飾 牡丹と唐獅子

南面妻飾 菊

復興の歩み



被災直後

被災直後



脱落した組物の復旧

脇障子・廻縁の破損部の復旧

柱の建て直し

地震で柱や束が傾き、三の神殿は危うく倒れそうになりましたが、事前着工の許可をもらってすばい応急処置ができたので、本震以後も多発した余震による倒壊を防ぐことができました。破損の多かった浜縁・木階・脇障子を解体し、傷んでいるところを補修して再度組立てました。傾いた柱や束は建て直しを行いました。軸が欠損した板唐戸は太柄を仕込んで接着し、緩みのあった仕口はクランプを使って締め直しを行いました。内陣の天井や長押などはゆがみが生じて入隅が開いたり傾いたりしていましたが、宮大工の腕と粘り強さにより元の通りに戻すことができました。



一の神殿 落書き

一の神殿の壁板の裏で今回発見された落書き。三の神殿の図柄を構想していたのでしょうか。

神幸門と還御門



神幸門 嘉永2年(1849)建立。平成31年3月復旧完了。



還御門 嘉永2年(1849)建立。平成31年3月復旧完了。



神幸門と還御門の彫刻と絵様は、基本的には同じ箇所と同じものが入りますが、一部異なる場合があります。上の写真は神幸門です。虹梁の下に墓股えぼこがありますが還御門には現在ありません。



上は神幸門と還御門で絵様の異なる門扉上の虹梁です。神幸門では波形(左)、還御門では雲形(右)の渦の絵様となっています。神幸門と還御門で、同じ位置の部材ではっきりとデザインを変えているのはこの部材だけになります。

復興の歩み

神幸門



墓股は地震で割れて防鳥ネットの上に落下していました。割れたところに太枘を仕込んで接着剤で接合しました。



扉は一旦取り外し、割れていた扉の板を補修、錆びていた唄金物ばいかななどは錆轉換の処置をした後に建て付け、左右の扉の高さを調整しました。

還御門



親柱上の組物が破損していました。元の位置に注意して番付札を打って取り外しました。割裂した箇所へ接着剤を注入するなど慎重に補修し、震災前の姿に戻っていました。